

達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註（中）

館 隆 志
吉 村 誠
師 茂 樹
山 口 弘 江
柳 幹 康

はじめに

本論は、二〇一八年に発見された達磨宗の新出史料である仏地房覚晏『心根決疑章』の訓註である。『心根決疑章』は、『楞嚴經』『円覚經』などの經典、俱舎や唯識・天台などの教理、ならびに禪宗の一大哲学書たる『宗鏡録』百巻など、各種各様の文献・教理を引用しており、その内容は極めて難解である。そこで、各専門家の協力を仰ぎ会読することで、その思想の読解を目指すものである。

筆者を研究代表者として、吉村誠、師茂樹、山口弘江、柳幹康を共同研究者、高橋秀栄を研究協力者として「SPS科研費JP20K00060」の助成を受け、『心根決疑章』の読解を進めている。内容や文量から全体を三部に分けて読解し、「達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註」と題して成果を発表しているが、本論は『駒澤大学仏教学部論集』第五十二号（二〇二一年）に掲載した（上）に続く成果の一部である。

凡例

■本訓註では称名寺所蔵(金沢文庫管理)『心根決疑章』(以下、金沢文庫本)を底本として用いる。その本文はすでに館隆志「称名寺所蔵(金沢文庫管理)『心根決疑章』翻刻―達磨宗新出史料の紹介」(『東アジア仏教研究』一七、二〇一九年)が翻刻しており、本訓註にもこの成果を用いている。

■異本として江戸時代に刊行された国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』(以下、国文研本)があり、適宜取り上げる。なお、国文研本の翻刻と、金沢文庫本との対校は、館隆志「国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』について」(『駒澤大學佛教學部研究紀要』八〇、二〇二二年)にて論じており、本訓註でもこの成果を用いている。

■量を踏まえて全体を大まかに三分割して読解を進め、その成果を三年に分けて発表する予定であり、本論はその成果の一部にあたる。

■各段落ごとに①から数字を振っているが、これは大まかな文脈や、量を踏まえた便宜上のものである。

■最初に原文を載せ、次に書き下し、次に訳文、次に語注、次に補注の順番で掲載した。また、金沢文庫本を原文として掲載するが、その際、金沢文庫本にある訓点、返り点は掲載しなかった。

■使用する漢字は常用漢字を基本とする。

■金沢文庫本における書写時の誤読・誤写と思われる漢字については、書き下しに際して改め、その当該漢字右下に「*」を附し、注記にてその旨を記している。

■書き下しにあたり、金沢文庫本にある訓点や返り点は参考するに止めた。たとえば、金沢文庫本には「唯^{ナラ}遂^ニ使^メツ^メ禪家解^ニ経^ヲ」とあるが、この訓点通りに読んでも意味が理解できない。また、この他の訓点や返り点からも、金沢文庫本の訓点や返り点は著者自身が付けたものとは考えがたい。そのため、金沢文庫本の訓点や返り点と一致していない読みが少なくないことを予めお断りしておきたい。

■本論における略称は以下の通り。大正新脩大藏経Ⅱ大正藏。卍続藏経Ⅱ続藏。大日本仏教全書(大日本仏教全書刊行会)Ⅱ大日仏。道元禅師全集(春秋社)Ⅱ道元全。曹洞宗全書Ⅱ曹全。真言宗全書Ⅱ真言全。浄土宗全書Ⅱ浄全。

『心根決疑章』 訓註

⑬「原文」又真言宗中〔龍〕樹ノ菩提心論云、凡夫心如合蓮花〔云々〕。高野大師秘藏記云、問、掘秘教、凡夫心如合蓮花、聖人心似開蓮花。若以眼等識配蓮花者、眼等識為在心花所、在眼等根耶。答、在心識所。問、若眼識等心識所、眼根等曾可無用。雖眼根敗、尚明了可見。何故眼毀曾不見耶。答、譬如室中灯從壁穴明漏出。穴塞則光明不流出。眼根等穴穴塞時、何得光明流出耶。〔私云、首經意盲人〕。見暗不依眼根、但是無明。見何虧損〔云々〕。依此応言、見不出入、常遍法界〔云々〕有人云、秘藏記者非大師記〔云々〕。

「書さ下し」又真言宗中の龍樹の『菩提心論』に云く、「凡夫の心は合蓮花の如し〔云々〕」と。高野大師の『秘藏記』に云く、「問う、「秘教に掘れば、凡夫の心は合蓮花の如し、聖人の心は開蓮花に似たり。若し眼等の識を以て蓮花に配せば、眼等の識は為た心花の所に在るか、眼等の根に在るか」と。答う、「心識の所に在り」と。問う、「若し眼識等心識の所であれば、眼根等は曾て用無かる可し。眼根敗ると雖も、尚お明了に見る可し。何が故にか眼毀れば曾て見えざるや」と。答う、「譬えば室中の灯の壁の穴從り明り漏出するが如し。穴塞げば則ち光明流出せず。眼根等穴穴塞がる時、何ぞ光明の流出するを得んや」と。〔私に云く、「首經」の意、盲人なり〕。暗を見ること眼根に依らず、但だ是れ明り無きなり。見何ぞ虧損せん〔云々〕。此れに依れば応に言うべし、見出入せず、常に法界に遍し〔云々〕。有る人云く、「秘藏記」は大師の記には非らず〔云々〕」と。

○真言宗：真言陀羅尼宗の略。入唐して日本に密教を伝えた空海により始められる。○龍樹ノ菩提心論〔合蓮花〕云々
：「補1」。○龍樹：二世紀のインド僧。ナーガールジュナ〔梵：Nagarjuna〕のこと。真言宗では龍樹は「付法八祖」の三祖とされた。○菩提心論：『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』の略。龍樹の作と伝えられる。○高野大師秘藏記〔常遍法界〕云々：「補2」。○高野大師秘藏記：「補3」。○秘教：密教のこと。○聖人心似開蓮花：「補4」。○心花：心蓮。心蓮花のこと。肉団心を指す。○心識：密教では、心臓、肉団心のことを指す。心蓮花ともいう。○首經意盲人：「補5」。○虧損：毀損。物がかけていたむこと。○法界：ここでは、全世界の意味。○有人云、秘藏記者非大師記：「補6」。

「訳」また真言宗中の龍樹の『菩提心論』に言う、「凡夫の心は閉じている蓮花のようである(云々)」と。高野大師(空海)の『秘藏記』に言う、「問う、「秘(密)教によれば、凡夫の心は閉じている蓮花のようで、聖人の心は開いている蓮花のようである。もし眼等の識を蓮花に当ててみれば、眼等の識は心(蓮)花(肉団心)に在るか、眼等の根に在るか」と。答える、「心識(心蓮花||肉団心)に在る」と。問う、「もし眼識等が心識(心蓮花||肉団心)に在るならば、眼根等にははたらきがない。眼根が毀損したとしても、まだはつきりと見えるはずである。どういう理由で、眼が毀損したら見えなくなるのか」と。答える、「たとえば、室中の灯が壁の穴より漏れ出るようなものである。穴が塞がれば光りは漏れ出ない。眼根等の穴が一つ一つすべて塞がった時には、どうして光明が流出することがあろうか」と。(私に言う、『首楞嚴経』の意は盲人である)。暗を見ることは眼根によらないものであり、ただ明かりが無いためである。見ると言うはたらきがどうして壊れることがあるのか(云々)。以上のことから以下のように言える、見るはたらきは出入がなく、常に世界に遍満している(云々)。ある人が言う、

〔秘藏記〕は〔高野〕大師の撰述ではない(云々)と。

〔補注〕

1 菩提心論云、凡夫心如合蓮花(云々)：『金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論』「凡人心如合蓮華。仏心如満月」(大正藏三三・五七四b)とある。『金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論』は龍樹の作と伝えられる。

2 高野大師秘藏記(常遍法界(云々))：『秘藏記』「問、扼密教、凡夫心如合蓮華、聖人心似開蓮華。若以眼等識配心蓮花者、眼等識、為在心華所、為在眼根等所耶。答、在心識所。問、若眼識等在心識所、眼根等曾可無用。雖眼根毀尚明了可見。何故眼根毀曾不見耶。答、譬如室中灯從壁穴明漏出。穴塞則光明不流出。眼根等□穴塞時、何得光明流出耶」(定本 弘法大師全集)卷五・四二一(四三)。

3 高野大師秘藏記：『秘藏記』のこと。空海の著述と伝えられていたが、空海の著述としては認められていない。かつては、『弘法大師全集』巻二に収録されていたが、『定本 弘法大師全集』では、巻五に参考資料として収録されている。『秘藏記』の内容については、大沢聖寛『仁和寺藏本秘藏記——翻刻・校訂・現代語訳』(フジブックス、二〇〇九年)も参照。

4 聖人心似開蓮花：澄豪(一〇四九〜一一三三)『総持抄』にも、「秘藏記云、凡夫心如合蓮華、聖人心似開蓮華文」(大正藏七七・六九c)と引かれている。

5 首經意盲人：『首楞嚴經』卷一「仏告阿難、如來今日実言告汝、諸有智者要以譬喻而得開悟。阿難、譬如我拳若無我手不成我拳。若無汝眼不成汝見。以汝眼根例我拳理、其義均不。阿難言、唯然、世尊、既無我眼不成我見、以我眼根例如來拳、事義相類。仏告阿難、汝言相類、是義不然。何以故如無手人拳畢竟滅、彼無眼者非見全無。所以者何。汝試於途詢問盲人、汝何所見。彼諸盲人必來答汝、我今眼前唯見黑暗、更無他暈。以是義觀、前塵自暗。見何虧損。阿難言、諸盲眼前唯觀黑暗、云何成見。仏告阿難、諸盲無眼唯觀黑暗、与有眼人處於暗室、二黑有別。為無有別。如是、世尊、此暗中人与彼群盲、二黑校量曾無有異。阿難、若無眼人全見前黑、忽得眼光還於前塵、見種種色名眼見者、彼暗中人全見前黑、忽獲灯光亦於前塵見種種色、心名灯見。若灯見者灯能有見自不名灯。又則灯觀何闕汝事。是故当知灯能顯色。如是見者是眼非灯。眼能顯色。如是見性是心非眼」(大正藏一九・一〇九b)。

6 有人云、秘藏記者非大師記：降瑜(一七七三〜一八五〇)『捨要記』を引く、心覚(一一一七〜一一八〇)の口伝集には、「或云、秘藏記大師御作也云々。或言、惠果口伝是唐書也云々」(真言全九・二三五〜二三六)とある(向井隆健「秘藏記」成立考)『密教学研究』十五、一九八三年)。『秘藏記』の最も古い注釈書である深賢(?) (一一二六)の『秘藏抄』(深賢抄)に、「不空口説惠果記」「惠果口説大師記」とあり、その後、『秘藏抄』(深賢抄)の説は、多くの注釈書で受け継がれていったことが指摘されている(中川善教「秘藏記についての序説」『密教学研究』一、一九六九年)。このように、鎌倉前期においては、『秘藏記』は、著者を空海とすることが一般的である一方で、異説があることもある程度知られていたようである。

⑰「原文」又瑜伽論第一云、爾時父母貪愛俱極、最後決定各出一滴濃厚精血、二滴和合住母胎中合為一段。猶如熟乳凝結之時。當於此處一切種子異熟所撰、執受所依阿頼耶識和合依託。又云、此羯邏藍(此云疑・得)色与心心所安危共同故依託。由心心所依託力故、色不爛壞。色損益故、彼亦損益。又羯邏藍識最初託處即名肉心。如是識於此處最初託、還即從此處最後捨。「書さ下し」又た「瑜伽論」第一に云く、「爾の時父母の貪愛俱に極まり、最後決定して各おの一滴の濃厚精血を出だし、二滴和合して母胎の中に住し、合して一段と為る。猶お熟乳の凝結の時の如し。此の處に当りて一切種子の異熟に撰せられ、執受の所依たる阿頼耶識に和合し依託す」と。又云く、「此の羯邏藍(此れを凝・滑・と云う)の色と心・心所とは安危共同なるが故に依託す。心・心所の依託力に由るが故に、色爛壞せず。色損益するが故に、彼も亦た損益す。又た羯邏藍の識の最

初に託する処を即ち肉心にくしんと名づく。是の如く識しき此の処に於いて最初に託し、還また即ち此の処より最後に捨しす」と。

○瑜伽論第一ノ和合依託：「補1」。○瑜伽論：『瑜伽師地論』のこと。○貪愛：好ましい対象に強く執着すること。○決定：必ず。必然的に。○種子：「梵」bījaの訳。いろいろの現象を起こさせる可能性。植物の種子にたとえていう。阿頼耶識の中に存在する。○異熟：過去世や現世などの行為を因として、未來世に果報が生じる際、その果報が因と異なった形で熟することをいう。○執受：心・心所によつて維持されている身体。○所依：よりどころ。根拠。○阿頼耶識：根本的な識。第八識。○依託：よりどころとする。相互に影響しあうこと。○此羯邏藍ノ此処最後捨：「補2」。○羯邏藍：受胎直後の七日間。○疑得：凝滑。羯邏藍の別称「補3」。○心・心所：心と心のはたらき。心と心に属する精神作用。○安危共同：安危同一。一方が良い状態になれば他方も良い状態になり、逆に一方が悪い状態であれば他方も悪い状態となる相互関係をいう。身体とその構成要素、羯邏藍と心・心所、身体と識、の相互関係がこれに当たる。○爛壞：ただれくずれ。○損益：損じ、または益すること。○肉心：肉団心。心臓。

〔訳〕又た『瑜伽論』第一に言う、「その時、父母の貪愛がともに極まると、最後に必ずそれぞれ一滴の濃厚な精液と血液を出し、その二滴が和合して母胎の中に留まり合わさつてまじり一つとなる。まるで成熟した乳が凝結するかのようである。ここで、一切の種子は異熟〔識〕におさめられ、執受(有根身・種子)のよりどころである阿頼耶識に和合し、(そこをよりどころとして)存在を託す」と。また言う、「羯邏藍(受胎直後の七日間)(これを凝滑とも言う)の色(形あるもの)と心と心所は、安危同一なので相互に影響しあう。心と心所の相互に影響しあう力によるから、色(形あるもの)はただれ壊れない。色(形あるもの)に損益があるので、彼も損益する。また羯邏藍(受胎直後の七日間)の識が最初に託するところを肉心(心臓)と名づける。このように、識はここ(心臓)に最初に託され、またそれ(識)がここ(心臓)から最後に抜けていく」と。

〔補注〕

1 瑜伽論第一ノ和合依託：『瑜伽師地論』卷一「爾時父母貪愛俱極、最後決定、各出一滴濃厚精血、二滴和合住母胎中、合為一段。猶如熟乳凝結之時。當於此処、一切種子異熟所撰執受所依阿頼耶識和合依託」(大正藏三〇・二八三a)。

2 此羯邏藍ノ此処最後捨：『瑜伽師地論』卷一「又此羯邏藍色与心心所安危共同故名依託。由心心所依託力故。色不爛壞、色損益故、彼亦損益。是故說彼安危共同。又此羯邏藍識最初託処即名肉心。如是識於此処最初託、即從此処最後捨」(大正

藏三〇・二八三 c)。

3 疑得：誤写につき書き下しでは凝滑に改める。凝滑は羯邏藍の別称。法宝『俱舍論疏』卷九「分別世品三」「羯刺藍者此云和合、或云雜染、或云凝滑」(大正藏四一・五九七 a)、法雲『翻詠名義集』「歌羅邏。或羯邏藍此云凝滑。又云雜穢」(大正藏五四・一一〇六 b)、子璿『首楞嚴義疏注経』卷七に「羯邏藍者此云凝滑」(大正藏三九・九二三 c)とある。

⑱「原文」又云、又将終時、作惡業者識、於所依從上分捨、即從上分冷觸隨起。如是漸捨乃至心処。造善業者識、於所依從下分捨、即從下分冷觸隨起。如是漸捨乃至心処。當知後識唯心処捨、從此冷觸遍滿所依。又云、譬如灯焰生時、内執膏炷、外發光明。如是阿頼耶識、緣内執受、緣外器相。生起道理、心知亦爾(私云、此文粗似秘藏記意、而猶不及首經之中瓶空之喻)。「書き下し」又た云く、「又た將に終らんとする時、惡業を作る者の識、所依に於いて上分より捨し、即ち上分より冷觸隨つて起くる。是の如く漸く捨し乃ち心処に至る。善業を造る者の識は所依に於いて下分より捨し、即ち下分より冷觸隨つて起くる。是の如く漸く捨し、乃ち心処に至る。當に知るべし後に識は唯だ心処より捨す、此れ從り冷觸所依に遍滿す」と。又た云く、「譬えば灯焰の生ずる時、内に膏炷を執り、外に光明を發するが如し。是の如く阿頼耶識、内の執受を緣じ、外の器の相を緣ず。生起の道理、應に亦た爾りと知るべし」と(私に云く、此の文粗は『秘藏記』の意に似たるも、猶お『首經』の中の瓶空の喩に及ばず)。

○又将終時作惡業者遍滿所依：「補1」。○譬如灯焰生時心知亦爾：「補2」。○所依：よりどころ。○心処：心臓。○膏炷：アブラの灯火。○阿頼耶識：根本的な識。第八識。○執受：外の対象をありと認めて、それによって感覺を生ずること。○緣：対象にとる。○器相：器世界。器としての世界。○秘藏記：空海の著述と伝えられる。⑳「補3」参照。

○猶不及首經之中瓶空之喩：「補3」。○瓶空之喩：「補4」。

「訳」また『瑜伽師地論』に言う、「またいまにも(命の) 尽きようとする時、惡業を作った者の識は、よりどころとなる(身体の方) 上の方から解き放たれ、「身体の方) 上の方より冷たくなる」ことが次第に起くる。このようにしてだんたんと抜け出て、そうして心処(心臓) に至る。善業を造った者の識は、よりどころとなる(身体の方) 下の方より抜け出て、「身体の方) 下の方より冷たくなる」ことが次第に起くる。このようにしてだんたんと抜け出て、そうして心処(心臓) に至る。「最」後には識は

ただ心処(心臓)から解き放たれ、これより冷たくなることがよりどころ(となる身体)に遍満することが分かる」と。また『瑜伽師地論』に言う、「たとえば灯火の炎が生まれる時、内には灯芯を燃やしながら、外には光明を発するようなものである。このように、阿頼耶識は、(自分の)内側の執受(有根身・種子)を認識対象としておこし、外側の器世界を対象にとる。生起の道理は、このように理解できる」と(私の考えであるが、この文は、ほとんど『秘藏記』と同じ意味であるが、『首楞嚴経』の瓶をもって空(「は遍満していること」)をたとえた話には及ばない)。

〔補注〕

1 又將終時作惡業者→遍満所依：『瑜伽師地論』卷一「又將終時、作惡業者識、於所依從上分捨。即從上分冷觸隨起。如此漸捨乃至心処。造善業者識、於所依從下分捨。即從下分冷觸隨起。如此漸捨乃至心処。當知後識唯心処捨、從此冷觸遍満所依」(大正藏三〇・二八二a)。

2 譬如灯焰生時→応知亦爾：『瑜伽師地論』卷五十一「譬如灯焰生時、内執膏炷外發光明。如是阿頼耶識縁内執受縁外器相。生起道理応知亦爾」(大正藏三〇・五八〇a)。

3 不及首經之中瓶空之喻：仏地房覺晏は、多武峰において、『首楞嚴経』の「類伽瓶喻」を説法で用いていたことが、覺晏に参じた懷奘の伝記に記されている。『三大尊行状記』懷奘伝には「參多武峰達磨宗覺晏上人。聞見性成仏之旨、至首楞嚴之類伽瓶喻。知無空之去來。明無識生滅。晏即座即記曰、汝無始曠劫之無明、即解脫了也」(曹全一六・一四)とある。また、瑩山紹瑾『伝光録』「浄土ノ教門ヲ学シ、小坂ノ奥義ヲ聞きて後、鵝峰の仏地上人、トヲク仏照禪師ノ祖風ヲ受テ見性ノ義ヲ談ス。師ユイテ訪フ。精窮群ニコユ。有る時、首楞嚴経ノ談有り。類伽瓶喻の処ニ至テ空ヲ入ニ空増セス、空空トルニ空減セス、深く契処有り。仏地上人示す、如何力無始曠劫ヨリ此方、罪根惑障悉く消し、苦み皆な解脫シ畢ると。時に会字卅余輩、皆な以て奇異の思いヲナシ皆な悉く敬慕ス」(乾坤院本『伝光録』卷正、一〇二丁表)とある。この二書によれば、覺晏は「空を入るるに空増せず、空空を取るに空減せず」と言い、これを受けて懷奘は「知無空之去來。明無識生滅」を知り「深く契処」したことになる。

4 瓶空之喻：『首楞嚴経』卷二「阿難、譬如有人取類伽瓶、塞其兩孔滿中擎空、千里遠行用餉他國。識陰當知亦復如是。阿難、如是虚空非彼方來非此方入。如是阿難、若彼方來、則本瓶中既貯空去、於本瓶地底少虚空。若此方入、開孔倒瓶見

空出。是故当知識陰虛妄、本非因緣、非自然性」(大正藏一九・一一四c)とある。

⑩「原文」又宗鏡錄第四云、古釈有四。一、紇利陀耶。此云肉团心。身中五藏心也。如黃廷・經所明。二、緣慮心。此是八識。俱能緣慮自分境故。三、質多耶。此云集起心。唯第八識。積集種子生起現行。四、乾栗陀耶。此云堅実心。亦云真実心。此是真心也。然第八無別自体。但是真心、以不覺故、与諸妄想有和合不和合義。和合義若能含染淨目為藏識。不和合義体常不變目為真如。故知四種心本同一体(已上)。

『書き下し』又『宗鏡錄』第四に云く、「古釈に四有り。一は紇利陀耶なり。此に肉团心と云う。身中の五藏の心なり。『黃庭・經』に明める所の如し。二は緣慮心なり。此れは是れ八識なり。俱に能く自分の境を緣慮するが故なり。三は質多耶なり。此に集起心と云う。唯だ第八識のみなり。種子を積集し現行を生起するなり。四は乾栗陀耶なり。此に堅実心と云う。亦た真実心とも云う。此れは是れ真心なり。然るに第八には別の自体無し。但だ是れ真心にして、不覺を以ての故に、諸妄想と和合不和合の義有るのみ。和合の義は能く染淨を含み目づけて藏識と為す。不和合義は体常に不變にして目づけて真如と為す。故に知んぬ四種の心は本と同一体なるを(已上)と。

○宗鏡錄第四云「本同一体」：「補1」。○紇利陀耶：「梵」hrīḍayaの音写。このこでは心臓のこと。肉团心とも漢訳される。○黃廷經：黃庭經。道教經典。『上清黃庭内景經』『上清黃庭外景經』の総称。具体的な經典や箇所については不明。○緣慮心：感覺や知覺を意識したり、ものごとを思惟したちする心のはたらき。慮知心とも。境界を攀緣し、事物を思慮することから遠慮という。○質多耶：「梵」cittaの音写。質多。心と漢訳する。慮知心とも。○集起心：質多耶の異称「補2」。○現行：現にはたらいっているもの。○乾栗陀耶：「梵」hrīḍayaの音写。衆生本有の本性「補3」。○堅実心：衆生が本来そなえている心性。○自体：本体。本性。○不覺：心の本性に対する迷い。○妄想：誤った想念。○和合不和合義：『起信論』の説。染と浄とが和合したものを第八識、和合せずに絶対不變のものを真如とする。○染淨：けがれたことと清らかなこと。○藏識：阿頼耶識のこと。○体：本体。○真如：普遍的真理。万有の根源。

〔訳〕また『宗鏡錄』第四に言う、「古釈に四つある。一つは紇利陀耶である。この〔中国〕では肉团心と言う。身体中の五藏の心〔藏〕である。〔心臓のことは〕『黃庭經』に明かされている通りである。二つめは緣慮心である。これは八つの識である。

いずれも自分の対境を対象としてとることが出来るから、縁慮心と名付けられたのである。三つめは質多耶である。ここでは集起心という。第八〔阿頼耶〕識のことである。種子を積集し現行を生起するから〔名付けられたの〕である。四つめは、乾栗陀耶である。ここでは堅実心と言ひ、また真実心とも言ふ。これが真心である。しかるに、第八識には、別の本体は存在しない。真心そのものであり、不覚(迷い)があるために、諸々の妄想と和合している、和合していないという意味があるのだ。和合しているというのは、汚れや清らかさを含むことができるので、それを藏識(含むことが出来る識)と名付ける。不和合というのは、本体が常に不変であるので真如と名付ける。それ故に、四種の心は本来同一体であると分かる〔已上〕と。

〔補注〕

1 宗鏡録第四云く本同一体：『宗鏡録』第四「且約一心、古積有四。一、紇利陀耶。此云肉团心。身中五藏心也。如黃廷經所明。二、縁慮心。此是八識。俱能縁慮自分境故。色是眼識境。根身種子器世界。是阿頼耶識之境。各縁一分故云自分。三、質多耶。此云集起心。唯第八識。積集種子生起現行。四、乾栗陀耶。此云堅実心。亦云貞実心。此是真心也。然第八識無別自体。但是真心、以不覺故、与諸妄想有和合不和合義。和合義者、能含染淨、目為藏識。不和合者、体常不変、目為真如。都是如来藏。故楞伽經云、寂滅者名為一心。一心者即如来藏。如来藏亦是在纏法身。經云、隱為如来藏、顯為法身。故知四種心本同一体」(大正藏四八・四三四c)。「宗鏡録」は、宗密「禪源諸詮集都序」卷上之一「汎言心者、略有四種。梵語各別翻譯亦殊。一、紇利陀耶。此云肉团心(中略)故知四種心本同一体」(大正藏四八・四〇一c~四〇二a)に基づく。

2 集起心：質多耶の異称。『アヒダルマコーシャ(阿毘達磨俱舍論)』「積み重なる(cinou)から心(cita)である」(櫻部建『俱舍論の研究―界・根品』一九六九年、三〇〇頁)、真諦訳『阿毘達磨俱舍論』卷三「釈曰、心以増長為義」(大正藏二九・一八〇c)、玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』卷四「論曰、集記故名心」(大正藏二九・二一c)とある。

3 質多耶・紇利陀耶・乾栗陀耶：質多耶はcittaの音写、紇利陀耶と乾栗陀耶はhidayaの音写であり、それぞれ心とも漢訳される。質多耶・紇利陀耶・乾栗陀耶については、船山徹『仏教漢語 語義解釈 漢字で深める仏教理解』(臨川書店、二〇二二年、七二―八一頁)における仏教漢語の「心」の解説を参照。

②〇〔原文〕如是文証非但一处。然宗鏡録五十二云、小乘云、我宗取肉团与第六識為依。何要別執有第七識耶。論主(護法)破

云、不可説第六依於色。第六有三分別隨念計度自性分別故、故若許第六依色而住者、即同前五識、應無隨念計度二種分別（已上）。

「書さ下し」之くの如き文証、但だ一処なるのみには非ず。然るに『宗鏡録』五十二に云く、「小乗云く、我が宗は肉団を取り第六識の与に依と爲す。何ぞ別して第七識有りと執するを要すや。論主（護法）破して云く、第六の色に依ると説く可からず。第六に三分別隨念と計度と自性ととの分別有るが故に、故に若し第六の色に依りて住すと許さば、即ち前五識に同じ、應に隨念と計度と二種の分別無かるべし（已上）」と。

○文証：証拠となる經論の文言。○宗鏡録五十二云く二種分別（已上）：「補1」。○第六識：意識。○第七識：末那識。あらゆる自我の觀念・煩惱の根拠とされる。○護法：ダルマパラー（梵：Dharmapala）。六世紀中頃。南インド出身。ナランダーで活躍した瑜伽行派の僧。著書に『大乘広百論釈論』『成唯識論』がある。『成唯識論』は世親『唯識三十頌』の注釈書であり、インド十大論師の注釈書のうち、護法の解釈を正義として一書にまとめたもの。顕慶四年（六五九）に玄奘によって漢訳された。○三分別：自性分別、計度分別、現隨念分別の三つ「補2」。○隨念：隨念分別。過去に經驗したことを思い起こして考えること。○計度：計度分別。現在知覚している意識がいろいろと考えること。○自性：自性分別。六識がそれぞれの対象を認識すること。

「訳」このような文証は、一ヶ所だけではない。しかるに『宗鏡録』五十二に言う、「小乗は言う、「我が宗では肉団（心臓）をもつて、第六識（意識）のためのよりどころとしている。どうして別に第七識（末那識）があると主張する必要があるか」と。論主の護法は破して言った、「第六識（意識）が色（形あるもの）によっているとは説いてはならない。第六識（意識）に三つの分別である隨念（思い起こして考えること）と計度（現在知覚している意識が考えること）と自性（六識がそれぞれの対象を認識すること）があるため、もし第六識（意識）が色（形あるもの）をよりどころとしていると認めるのであれば、前五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）と同じであり、隨念と計度という二種の分別は無いはずだ（已上）」と。

〔補注〕

1 宗鏡録五十二云く二種分別（已上）：『宗鏡録』五十二「小乗云、我宗取肉団与第六識為依。何要別執有第七識耶。論主破云、亦不可説第六依於色故。第六必依意有說意非是色故。又説、第六有三分別隨念計度自性分別故、若許第六依色而住者、

即同前五識。無隨念計度二種分別」(大正藏四八・七二二c)。

2 三分別：『成唯識論』卷五「謂如五識必有眼等增上不共俱有所依。意識既是六識中摂、理心許有如是所依。此識若無彼依寧有。不可説色為彼所依。意非色故、意識心無隨念計度二分別故」(大正藏三一・二五b)、『阿毘達磨俱舍論』卷二「論曰、伝説、分別略有三種、一自性分別、二計度分別、三隨念分別。由五識身雖有自性而無余二、説無分別。如一足馬名為無足。自性分別唯是尋。後心中自当并釈。余二分別如其次第、意地散慧諸念為体。散謂非定。意識相応散慧。名為計度分別。若定若散意識相応諸念、名為隨念分別」(大正藏二九・八b)。

②「原文」私云、今文所引小乘一説、自当深理。而護法既還違其理、難言同前五識、無計度隨念二種分別者、宗鏡之中雖引其文、而不評判。遂令後学不知誰非。吾今翻破令識其非。汝宗既云、七八二識互相為根。今難第六以末那為根故有分別計度者、第八何故以末那為根、而無分別計度耶。若爾翻例応云、第六雖以色根為依、不遮亦有分別計度。

「書さ下し」私に云く、今の文に引く所の小乗の一説は、自ずから深理に当たる。而るに護法既に還て其の理に違して、難じて前の五識に同じ、計度と隨念との二種の分別無しと言は、『宗鏡』の中其の文を引くと雖も、而れども評判せず。遂に後学をして誰か非なることを知らざらしむ。吾れ今翻て破して其の非を識しめん。汝の宗既に云く、「七八の二識は互いに相根と為る」と。今難ず第六は末那を以て根と為すが故に分別の計度有りとせば、第八は何が故に末那を以て根と為すも、分別の計度無きや。若し爾らば例に翻じて応に云うべし、「第六は色根を以て依と為すと雖も、亦た分別の計度有ることを遮らず」と。

○深理：深い道理。真理。○無計度隨念二種分別者、宗鏡之中雖引：「補1」。○評判：是非を判定すること。批評すること。○汝宗既云、七八二識、互相為根：「補2」。○汝宗：ここでは、法相宗、唯識宗。○末那：末那識。あらゆる自我の觀念・煩惱の根拠とされる。○分別計度：計度分別に限定した表現「補3」。○第八：阿頼耶識。根本的な識。

「訳」私見によれば、今の文に引用される小乗の一説は、自のずから真理に当たっている。しかし、護法はその理に反して、論難して「第六識が」前五識と同じであり、計度と隨念の二種の分別は無いと言っている。『宗鏡録』はこれを引用するが、その是非を判断していない。その結果、後学は誰が間違ったのか分からなくなってしまう。そこで私は今、論破してその非

を識らしめよう。汝の宗（法相宗）は言っている、「七・八識の二識は互いに根となる」と。今論難すれば、第六識は末那識を根とするゆえに計度分別があるとするならば、第八識はどういう理由で末那をもつて根としているのに、計度（の分別）が無いというのか。そうなら、例を覆して言うべきだ、「第六識は色根によつてはいるが、また計度（の分別）があることを排除することはない」と。

〔補注〕

1 無計度隨念二種分別者、宗鏡之中雖引：『成唯識論』卷五「不可說色為彼所依。意非色故。意識心無隨念計度二分別故」（大正藏三一・二五b）。『宗鏡錄』卷四十四「又如衆生八識之中前眼耳鼻舌身等五根及第八識俱緣現量、得諸法之自性、不帶一切名言。又無二種計度分別隨念分別、即現前不生滅。若六七二識落在比非二量、及具計度隨念分別、即念念常生滅」（大正藏四八・六七三c）。

2 汝宗既云、七八二識、互相為根：『成唯識論』卷四に記された淨月の説「是故応言、前五轉識一一定有二俱有依。謂五色根同時意識。第六轉識決定恒有一俱有依。謂第七識。若与五識俱時起者亦以五識為俱有依。第七轉識決定唯一俱有依。謂第八識。唯第八識恒無轉變、自能立故無俱有依」（大正藏三一・二〇b）。これを受けた『成唯識論』卷四に記された護法の批判「有義此説猶未盡理。第八類余既同識性、如何不許有俱有依。第七八識既恒俱轉更互為依斯有何失。許現起識以種為依。識種亦應許依現識。能熏異熟為生長住依。識種離彼不生長住故」（大正藏三一・二〇b）。

3 分別計度：計度分別に限定した表現。たとえば、『首楞嚴經』卷四「世間無知、惑為因緣及自然性、皆是識心分別計度」（大正藏一九・二一七c）とあり、『宗鏡錄』卷四「問、第七現有計度分別。何無尋求心。答、夫尋求心皆依率爾。後尋求方生。第七既無率爾。尋求亦無」（大正藏四八・四三四a）とあるように、計度分別に限定した表現として分別計度を用いている。

②〔原文〕若依依*瑜伽慈尊所説、既以肉心為第八根。汝宗何故違背本祖、不顧自過。拋理応言、六七八識、俱以肉心為所依根。然第八識無計度者、同於前五。色根為依而無計度。以此而言真妄和合。法爾所作不応定執。何況汝宗既云、若得自在、諸根互用、一根發識、緣一切境（じせつ）。

〔書き下し〕若し瑜伽（ゆが）の慈尊（じそん）の所説（しよせつ）に依らば、既に肉心（にくしん）を以て第八の根（ね）と為す。汝の宗何の故（ゆゑ）にか本祖（ほんそ）に違背（いはひ）して、自らの

過を顧みざるや。理に拠らば応に言うべし、六七八識は、俱に肉心を以て所依の根と為すと。然るに第八識に計度無きことは、前の五に同じ。色根を依と為すも計度無し。此れを以て言へば真妄相合なり。法爾の所作応に定執すべからず。何ぞ況んや、汝の宗の既に、「もし自在を得れば、諸根互用するをもて、一根が識を發して、一切の境を緣ず〔已上〕と云えるをや。

○慈尊：彌勒菩薩のこと。○違背：そむくこと。○真妄：真実と虚妄。○法爾：自然。あるがままにあるありよう。○定執：固定的な理解。断定。○若得自在縁一切境：「補1」。○互用：互いに他のもののはたらきをもなすこと。

〔訳〕もし『瑜伽師地論』の慈尊(彌勒菩薩)の説くところによるならば、既に肉心(心臓)を第八識の根としている。汝の宗(法相宗)は、どういう理由で、本祖(彌勒菩薩の説)に違背して、自分から過失を顧みないのか。「教」理によれば以下のように言うべきだ、六・七・八識は、ともに肉心(心臓)をよりどころの根としている。しかるに、第八識には計度(現在知覚している意識が考えること)が無いことは、前五識(眼識、耳識、鼻識、舌識、身識)と同じである。色根をよりどころとしても計度(の分別)はない。こういうわけで、真実と虚妄が相合していると言うのである。法としてそのように作られているものなので、「必ずこうだと決めつけて」固定的な理解をするべきではない。ましてや、汝の宗は既に言っている、「もし自在を得たなら、諸根が互いにはたらきをなし、一根が識を發して、一切の対境をつくりだす〔已上〕と。

〔補注〕

1 若得自在縁一切境：『成唯識論』卷五「若得自在諸根互用、一根發識緣一切境」(大正藏三一・二六a)。「宗鏡録」卷五十五「論云、若得自在諸根互用。一根發識緣一切境」(大正藏四八・七三七a)。

②③「原文」又小乗不許五識各超於自境外緣於他境、而首楞嚴經云、循体外繞、以手摩頭足一弁〔已上〕。此是証於凡位之中亦有一分互用之義。謂以身識知眼見中形色故也。設雖生盲、盡知方圓。又大小二宗俱判定說眼識起時、空明根色四緣發識(涅槃經中有此說也。唯識宗中眼識九緣之中初四緣亦同此說)。

〔書き下し〕又小乗は五識各おの自境を超えて外に他境を緣することを許さず、而れども『首楞嚴經』に云く、「体に循つて外に繞らせ、手を以て頭足を摩せば一弁す〔已上〕と。此れは是れ凡位の中に於いても亦た一分の互用の義有り」と証す。謂く身識の眼見の中の形色を知るを以ての故なり。設い生盲と雖も、盡ぞ方圓を知らんや。又た大小の二宗は俱に判じ眼識起こ

る時を定説して、空と明と根と色との四縁をもて識を發すとす（『涅槃經』中に此の説有り。唯識宗中に眼識九縁の中初めの四縁も亦た此の説に同じ）。

○首楞嚴經云、循体外繞以手摩頭足一弁：「補1」。○凡位：凡夫の位。煩惱を有し、いまだ真理をさとっていない人の位。
○四縁：現象的存在を生じる四つの原因。○空明根色、四縁發識（涅槃經中有此説：出典不詳「補2」。○眼識九縁之中初四縁：空・明・根・境の四つ「補3」。

「訳」また小乗は五識それぞれが自境を超えて外に他境を認識することを認めていない。ところが『首楞嚴經』に言う、「手を」身体にそつてめぐらし、手で頭や足をなでれば（それが頭や足だと）わかる（「已上」と。このことは凡夫の中でもまた一部分それぞれが互用している意味があることを証明している。それは身識は眼が見ているものの形を知っているからだ。たとえ生まれつき目が見えない人でも、どうして四角や円を知らないことがあるのか。また大小の二宗ともに判断して眼識起る時を説いて、空・明・根・色の四縁は識を發するという（『涅槃經』の中にこの説がある。唯識宗の眼識九縁の中の、初めの四縁（空・明・根・境）もまたこの説に同じである）。

〔補注〕

1 循体外繞（頭足一弁）：『首楞嚴經』卷四「彼人以手循体外繞、彼雖不見頭足一弁」（大正藏一九・一二三c）。『宗鏡錄』卷三「彼人以手循体外繞、彼雖不見頭足一弁」（大正藏四八・四三二b）。

2 空明根色、四縁發識（涅槃經中、有此説也）：出典不詳。『大般涅槃經』卷四十「憍陳如品十三」「或有説言正有四縁」（大正藏二一・六〇〇b）。

3 眼識九縁之中初四縁：『大乘百法明門論疏』卷上「九縁者、一空、二明、三根、四境、五作意、六根本、七染淨、八分別、九種子」（洪武南藏二〇五・二五二b）、『円覺經大疏』卷二「眼識九縁生（空・明・根・境・作意・根本・染淨・分別・種子）」（統藏一四・一四八a）。

②④「原文」問、雖云以肉团而為意根、何直不云肉心、或云意思耶。答、意所依故、名為意思、依主釈也。眼等亦爾。眼耳即是見聞異名也。故諸經云、以心眼見等（云々）、持業釈也。義忠百法論疏云、字義相当名眼耳等（已上）。汝不知此義、始於意根

起疑難矣。然楞嚴經正說法相、求異諸說。闇中見闇、開眼閉眼、俱見闇也。爾時不用空及根明。盲人見暗亦復如是。所見明闇、雖有相順、能見性本無動搖。見有見無、雖有處異、能見覺心、周遍法界。其見即是妙明無上菩提。

「書さ下し」問う、「肉団を以て意根と為すと云うと雖も、何ぞ直ちに肉心と云わず、或いは意思と云うや」と。答う、「意の所依なるが故に、名づけて意思と為す、依主積なり。眼等も亦た爾り、眼耳は即ち是れ見聞の異名なり。故に諸經に云く、「心眼を以て見る等(云々)」と、持業積なり。義忠の『百法論疏』に云く、「字と義と相当して眼耳等と名づく(已上)」と。汝此の義を知らず、始めて意根に於いて疑難起こせり。然るに『楞嚴經』に正しく法相を説くに、異なる諸説を求む。闇中に闇を見るに、眼を開くも眼を閉づるも、俱に闇の色を見るなり。爾の時空及び根と明を用いず。盲人の暗を見ること亦復た是の如し。所見の明闇は、相の順有りと雖も、能見の性は、本より動揺すること無し。見有と見無と、処の異なり有りと雖も、能見の覺心は、法界に周遍せり。其の見は即ち是れ妙明なる無上菩提なり」と。

○依主積：六合積の一つ。複合語を構成する前半の語が後半の語に対して格の關係にあるもの。名詞・代名詞と、名詞・代名詞・形容詞とが合して一つの語を形成するとき、前の部分である名詞・代名詞が後の部分の性質を制限・規定するとみる解釈をいう。○諸經云、以心眼見等(云々)：「補1」。○持業積：六合積の一つ。二つの語が合して一つの複合語をつくる場合に、前の部分の語が、後の部分の語に対して形容詞、副詞、または同格の名詞であると解すること。○義忠：唐代の人。○百法論疏字義相当名眼耳等(已上)：「補2」。○百法論疏：唐代の義忠が撰述した『大乘百法明門論疏』のこと。○疑難：疑い難ずる。はなはだ疑わしい。○法相：教えの特質。一切のものの真実の姿。一切諸法の本性。○闇中見闇、開眼閉眼、俱見闇也：「補3」。○頤：かたちのよいさま。○能見：見る主体。○覺心：目覚めた心。○周遍法界：法界(宇宙)にあまねく行き渡ること。○是妙明無上菩提：「補4」。○妙明：すぐれた真実の智慧。○無上菩提：無上最高のさとり。

〔訳〕問う、「肉団(心臓)を意根と言っているが、どうして直接的に肉心(心臓)〔根〕と言わず、あるいは意思と言うのか」と。答える、「意のよりどころであるため、意思と名づける、これは依主積である。眼等もまたこのようである。眼耳は見聞の異名である。ゆえに諸經に言う、「心眼をもつて見るなど(云々)」と、これは持業積である。義忠の『大乘百法明門論疏』に言う、「字と義とが相当して眼耳等と名づける(已上)」と。あなたはこの義を知らないので、意根に疑念を起こしたのだ。

しかしながら『楞嚴經』は正しく法相を説いているのに、異なる諸説を求めている。闇中で闇を見る時、眼を開いても眼を閉じても、ともに闇の色を見ている。その時は、空・根・明を用いない。盲人が暗闇を見ることもまたこのようである。所見（見られる対象）の明闇に、姿形の良し悪しが有ったとしても、能見（見る主体）の本性は、もとより揺れ動くことがない。見ることの有無や、相違が有ったとしても、能見（見る主体）の覚心（目覚めた心）は、法界（宇宙）にあまねくゆきわたっている。その見るといふはたらしこそが妙明にして無上のさとりである。

〔補注〕

1 諸経云、以心眼見等（云々）：『仏説觀普賢菩薩行法經』「普賢菩薩教其憶念十方諸仏。隨普賢教正心正意、漸以心眼見東方仏身黄金色端嚴微妙。見一仏已、復見一仏。如是漸漸遍見東方一切諸仏、心相利故、遍見十方一切諸仏」（大正蔵九・三九〇c）。『禪秘要法經』卷三「若鈍根者復当更教風大觀法。風大觀法者見一切風極為微細、細中細者可以心眼見而不可具説」（大正蔵二五・二六二c）。

2 百法論疏、字義相当名眼耳等（已上）：『大乘百法明門論疏』「由此聖教説眼耳通、是眼耳識相応心智性」（洪武南蔵二〇五・二四九a）。

3 闇中見闇、開眼閉眼、俱見闇也：林常快道（一七五一〜一八一〇）の『阿毘達磨俱舍論法義』に「問、暗中見闇色不。答、光宝異解。光師（五五左）許見次近闇色。宝師必不許之。今云、宝為尽理。何者、於闇中開眼閉眼同黒闇不見色故」（大正蔵六四・六四a）とある。あるいは『心根決疑章』が用いられたか。

4 是妙明無上菩提：『楞嚴經』卷四「仏言、此見妙明、与諸空塵亦復如是。本是妙明無上菩提淨円真心」（大正蔵一九・一一二b）、『宗鏡録』卷九十四「仏言、此見妙明、与諸空塵、亦復如是。本是妙明無上菩提淨円真心」（大正蔵四八・九二五a）。

②⑤「原文」又経云、跋難陀龍無耳而聞、憍梵波提異舌知味、舜若多神無身而触、摩訶迦葉久減意根、円明了知不以因心念（已上）依此而言耳等諸根亦不必依根發聞等也。以是応知隨機權説多不尽理。但知隨器方円之空、不悟本無大小之空。唯信違雲疾走之月、不知運月即不運月。嗚呼、遠哉遠哉。首經之中色根之義委悉如前。又此經中於心法中、立根義者見聞覺（覺一字収嗅

嘗触三。三是同一。合中知。故可読於保由。触身覺故知。名之為根。

〔書下し〕又た経に云く、「跋難陀龍は耳無くして聞き、憍梵波提は異舌もて味を知り、舜若多神は身無くして触れ、摩訶迦葉は久しく意根滅すれども、円明に了知すること心念に因るを以てせず〔已上〕」と。これに依りて言えば、耳等の諸根も亦た必ずしも根に依りて聞等を發せず。是を以て応に知るべし機に随がう權説は多く理を尽さず。但だ器の方円に随う空を知るのみにして、本より大小無きの空を悟らず。唯だ雲に違い疾く走るの月を信するも、運月の即ち不運月なることを知らず。嗚呼、遠き哉、遠き哉。『首経』中の色根の義、委悉すること前の如し。又た此の経中、心法中に於いて、根の義を立つる者の見聞覺の一字は嗅嘗触の三を収さむ。三は是れ同一なり。合中知なり。故に於保由と読む可し。身に触れて覺するが故なり。知なり。之を名づけて根と為す。

○跋難陀龍以因心念：「補1」。○跋難陀龍無耳而聞：跋難陀龍は八大竜王の一。マガダ国を守護し、慈雨を降らせ飢饉がないようにした「補2」。○憍梵波提異舌知味：憍梵波提は仏の弟子の一人、憍梵波提のこと。解律第一といわれる「補3」。○舜若多神無身而触：舜若多は空性(梵・sunyata)の音写で、主空神を舜若多神という「補4」。○摩訶迦葉：仏十大弟子の一人、摩訶迦葉のこと。禪宗における西天第一祖「補5」。ここでは、滅尽定の声聞として例示。○円明：みごとで完全なこと。○了知：明らかに知ること。認識する。○心念：心のおもい。○隨機：場合場合に依りて適切な処置をする。○權説：仮の教え。○唯信違雲疾走之月、不知運月即不運月：不詳「補6」。○首経之中、色根之義、委悉如前：「補7」。○委悉：物事を事細かに詳しくすること。○心法：心のこと。心王のこと。心の本体のこと。○覺一字収嗅嘗触三。三是同一、合中知故：「補8」。○見聞覺知：見たり、聞いたり、考えたり、知ること。○合中知：器官(根)が対象(境)と直接に接觸して知覺を生ずること。五根のうち鼻・舌・身の三根の知覺のことをいう。離中知の対。○於保由：おほゆ。覺の日本語の読みを記したもの。

〔訳〕又た経に言う、「跋難陀龍は耳が無いのに聞き、憍梵波提は異舌でも味を知り、舜若多神は身体が無いのに触れ、摩訶迦葉は久しく意根が滅していても、心念によることなくありありと了知した〔已上〕」と。これによつて言えば、耳等の諸根は必ずしも根に依りて聞等を發するのではない。以上のことから、次のように言える、相手の機根に依じた仮の教えは道理を尽してはいないことが多いと。ただ器の四角や丸の形に随う空を知るだけであり、大小〔の分別〕がもとより無い空を悟れない。

ただ雲から疾く離れ去る月〔があると〕を信じて、動いて見える月が〔実際には〕動いていないことを知らないのだ。ああ、なんと遠きことか、なんと遠きことか。『首楞嚴經』の中の色根の義については、詳細は前に記した通りである。またこの『首楞嚴經』で心法の中に根の義を立てているのは見聞覚（覚の一字は嗅嘗触の三つの意味を含んでいる。この三つは同一である。合中知（鼻・舌・身の三根の知覚）である。だから「おぼゆ」と読むべきである。身体に触れて知覚するためである）知である。これを根と名づけるのである。

〔補注〕

1 跋難陀龍（以因心念）：『楞嚴經』卷四「跋難陀竜無耳而聽、宛伽神女非鼻聞香、驕梵鉢提異舌知味、舜若多神無身有触。如來光中映令暫現。既為風質其体元無。諸滅尽定得寂声聞、如此会中摩訶迦葉、久滅意根、円明了知不因心念」（大正蔵一九・二二三c）、『宗鏡録』卷三「跋難陀竜無耳而聽、宛伽神女非鼻聞香、驕梵鉢提異舌知味、舜若多神無身有触。如來光中映令暫現。既為風質其体元無。諸滅尽定得寂声聞、如此会中摩訶迦葉、久滅意根、円明了知不因心念」（大正蔵四八・四三二b）。

2 跋難陀龍無耳而聞：子璿『首楞嚴義疏注経』卷四に「跋難陀云賢喜。与難陀竜常護摩伽陀国、雨沢以時、国無饑年。瓶沙王年設大会報竜之恩、人皆歡喜。從此得名難陀云歡喜、為目連所降。無耳而聽未詳縁起」（大正蔵三九・八八八b）とあるように、無耳而聞の典故は不明。

3 僑梵波提異舌知味：基『妙法蓮華経玄賛』卷一序品に「経僑梵波提摩訶俱絺羅。賛曰、梵云笈房鉢底、此云牛相。僑梵波提訛也。過去因摘一茎禾数類墮地、五百生中作牛償他。今雖人身尚作牛蹄牛同之相。因号為牛相比丘」（大正蔵三四・六七〇c）とある。子璿『首楞嚴義疏注経』卷四に「此云牛相。今経云、我有口業、於過去世輕弄沙門。世生生有牛齧病。齧者。牛凡食後常事虚哨。時人称为牛齧也。異舌者未見別縁。或可既云牛相、即其牛舌也。而能弁了人所食味。故云異舌知味」（大正蔵三九・八八八c）とある。

4 舜若多神無身而触：子璿『首楞嚴義疏注経』卷四に「舜若多云空、即主空神也。無色界天亦是此類。随其所主亦無色質。既為風質者。此約体不可見。故云元無。以仏力故故能暫現。亦頭有定自在色無業色。也無色界天涙下如雨。正是此事」（大正蔵三九・八八八c）とある。

5 摩訶迦葉：仏十大弟子の一人、頭陀第一の摩訶迦葉(梵：Mahā-kāśyapa)のこと。大迦葉・飯老尊者とも。摩揭陀国のバラモンの出身で、若くして出家し、釈尊の出世を知って仏教に帰依した。釈尊が亡くなった後、第一結集を行なったことで名高い。禪宗の伝承では、釈尊が靈鷲山で説法している際に花を拈じたところ、摩訶迦葉ひとりがその意味を悟り、破顔微笑し、釈尊と黙通証契したので、釈尊は迦葉に正法眼蔵涅槃妙心を付嘱し、迦葉は西天第一祖になったとされる。この釈尊との因縁を拈華微笑・破顔微笑などという。後には阿難に付法し、西天第二祖となした。

6 唯信違雲疾走之月、不知運月即不運月：不詳。『円覚経』「雲駛月運、舟行岸移」(大正藏一七・九一五c)などを踏まえるか。『正法眼蔵』「都機」に「釈迦牟尼仏、告金剛藏菩薩言、譬如動目能搖湛水、又如定眼猶廻轉火。雲駛月運、舟行岸移、亦復如是。いま仏演説の雲駛月運、舟行岸移、あきらめ参究すべし。倉卒に学すべからず、凡情に順すべからず。(中略)いま如来道の雲駛月運、舟行岸移は、雲駛のとき、月運なり、舟行のとき、岸移なり、いふ宗旨は、雲と月と、同時同道して同歩同運すること、始終にあらざり、前後にあらざり、舟と岸と同時同道して同歩同運すること、起止にあらざり、流転にあらざり」(道元全一・二六五く二六六)「愚人おもはくは、くものはしるによりて、うごかざる月をうごくともる、舟のゆくによりて、うつらざる岸をうつるとみゆる、と見解せり」(道元全一・二六六)とある。

7 首経之中、色根之義、委悉如前：訓註(上)⑨および⑩参照。

8 覺一字収嗅嘗触三。三是同一、合中知故：浄土宗の聖罔(一三四一〜一四二〇)『伝通記糅鈔』「不覺等者、覺知俱是、雖意識能、所掌是異。覺了淺知主深淺。又仏地房釈仏一字、立覺知差。覺者合中知、鼻舌身識也。知者離中知、眼耳意識也云云」(浄土三・一九四)とある。

②⑥ 「原文」故経云、如一見根見周法界、聴嗅嘗觸覺々々知亦復如是(已上)。即是七大之中根大文也。又云、生死流転即汝六根。菩提涅槃妙浄明体亦汝六根。不応於中更容他物(已上)。「書き下し」故に經に云く、「一の見根の見の法界に周きが如く、聴・嗅・嘗・觸・覺・觸・覺知、亦復た是の如し(已上)」と。即ち是れ七大の中の根大の文なり。又た云く、「生死の流転も即ち汝の六根なり。菩提涅槃妙浄明の体も亦た汝の六根なり。應に中に於いて更に他の物を容るるべからず(已上)」と。

○如一見根見く復如是：「補1」。○聽嗅嘗觸覺々々知亦復如是：「補2」。○法界：ここでは、全世界の意味。○即是七中之中根大文也：「補3」。○七大：地・水・火・風・空・見・識の七つの原理について、周遍法界の義を明らかにした。○『首楞嚴經』卷三に説かれる「補4」。○大：元素。大種。広くゆきわたっているので大となつた。○根大：目大。目大は六根のこと。○生死流転く更容他物：「補5」。○妙淨明体亦汝六根：「補6」。○流転：迷いの生死をつづけること。○六根：眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根。○菩提：「梵」bodhiの音写。悟りの智慧。○涅槃：「梵」nirvāṇaの音写。火（＝欲望）の止滅した状態。仏教における修行上の究極目標。

〔訳〕それ故に『首楞嚴經』に言う、「見根の見という働きが法界にあまねくゆきわたっているように、聴（触）・嗅（触）・嘗触・覺触・覺知もまたこのようである〔已上〕と。これは七大の中の根大（六根）の〔説明〕文である。また言う、「生死の流転も汝の六根である。菩提涅槃も靈妙にして清く明らかな本体もまた汝の六根である。六根以外のものを認めることはできない〔已上〕と。」

〔補注〕

1 如一見根見く復如是：『首楞嚴經』卷三「如一見根見周法界、聽嗅嘗觸覺觸覺知、妙德瑩然遍周法界、円満十虚」（大正藏一九・二一九a）。『心根決疑章』では「々々」と二文字であるが、經文では「觸覺知」に対応しているため、書き下し文や訳文の作成に際しては、經文の原文に戻して行なつた。

2 聽嗅嘗觸覺々々知亦復如是：『楞嚴經正脈疏』卷三「見周法界者、牒前見之徧周法界也。溫陵曰、嘗觸即舌根以味合方覺。故亦名觸。覺觸覺知身意二根也」（統藏一八・二三九c）とある。聽觸・嗅觸・嘗觸が、眼耳鼻舌、覺觸が身、覺知が意。合わせて六根になると解説している。

3 即是七中之中根大文也：七大に根大（六根）を含むことを述べている。『首楞嚴經』卷三では「見聞覺知」、「首楞嚴經」の注釈書では「見」に代表させているが、覺妄はこれを六根と記す。後述する参考史料の、『伝通記糅鈔』で「七大方者是何」の質問に対し、「仏地房」は「六大加知根大」と答えている。

4 七大：『首楞嚴經』卷三「若此識心本無所從、当知了別見聞覺知円満湛然性非從所、兼彼虚空地水火風均名七大自然円融、皆如来藏本無生滅」（大正藏一九・二一九a）とあり、地・水・火・風・空の五大に、識と見聞覺知を加えたものである。『首

楞嚴經』の注釈書で、『楞嚴經要解』卷六「地水火風空見識七大」(統藏一七・三七〇a)、『楞嚴經円通疏』卷三「地水火風空見識七大」(統藏一九・二五六d)とあるように、『首楞嚴經』における七代の説明は、地水火風空見識の七つとする説明が行なわれることが多い。

5 生死流転より更容他物：『首楞嚴經』卷五「阿難雖聞如是法音、心猶未明。稽首白仏云、何令我生死輪迴、安樂妙常。同是六根、更非他物。仏告阿難、根塵同源、縛脫無二。識性虚妄猶如空花。阿難由塵発知因根有相。相見無性、同於交蘆。是故汝今知見立。知即無明本、知見無。見斯即涅槃無漏真淨。云何是中更容他物」(大正藏一九・二二四c)。

6 妙淨明体亦汝六根：『首楞嚴經』卷二「仏告文殊及諸大衆、十方如來及大菩薩、於其自住三摩地中、見与見縁并所想相、如虚空花本無所有。此見及縁元是菩提妙淨明体、云何於中有是非是」(大正藏一九・一一二b)、『首楞嚴經』卷五「於是阿難及諸大衆、俱聞十方微塵。如來異口同音告阿難言、善哉、阿難、汝欲識知俱生無明、使汝輪転生死結根、唯汝六根更無他物。汝復欲知無上菩提、令汝速登安樂解脱寂靜妙常、亦汝六根更非他物」(大正藏一九・一二四b)。

〔参考史料〕『伝通記糅鈔』聖阿(一三四一)〜一四二〇)

又彼首楞嚴經中説二十五円通。所謂六根六境六識七大皆為悟入之門也。謂彼經會座有二十五人、各述得悟縁。謂觀音聞声、勢至念仏三昧等也。所云円通者名所証理徳。具有円常通三真実。円謂円満、常謂常住、通謂融通也。經約觀音説三真実。然仏地房以義亘二十五人而積成之。彼經第六云、譬如人静居、十方俱擊鼓、十処一時間。此則円真実。隔垣聽音響遐邇俱可聞。是則通真実。音声性動静、聞中為有無、無声号無聞、非実聞無性。声無既無滅、声有亦非生。生滅二円離、是則常真実矣。因問、七大者は何。答、六大加知根大。問、知根大者は何物耶。答、見聞臭嘗觸覚知也。問、若爾者在六根六識何重拳。答、二十五人悟境故如此、離合依機不同云云。問、根境識為悟入門其意如何。答、觀彼之性空寂為悟入義、故彼經云、三科七大皆如來蔵矣。又云、見聞覚知不能分隔、成一円融清浄宝覚矣。又問、上來諸文於此土一仏成六塵説法義、妙称一家釈。爾智論唯識違文何。答、一代今經余塵分明。不足疑也。但至智論雖拳別仏、不遮一仏。若是一途歟。又唯識論從多分説且云此土説名句文、謂施名句文、為能詮之用令他生解、故云仮立三。故若不依名句文、不名説法。是多分釈一往説也云云。(浄全三・三三三)

三三四)

「訓」又た彼の『首楞嚴經』中に二十五の円通を説く。所謂、六根・六境・六識・七大は皆な悟入の門と爲す。謂く彼の經の會座に、二十五人有り、各おの得悟の縁を述ぶ。謂く觀音の聞聲・勢至の念仏三昧等なり。云う所の円通とは所証の理徳を名づく。具には円・常・通の三真實有り。円は円満を謂い、常は常住を謂い、通は融通を謂うなり。經には觀音に約して三真實を説く。然して仏地房は義を以て二十五人に亘り之を釈成す。「彼の經の第六に云く、「譬えば人の静かに居すに、十方に俱に鼓を撃つに、十処一時に聞くが如し。此れ則ち円真實なり。垣を隔て音の響くを聴くに遐邇俱に聞く可し。是れ則ち通真實なり。音声の性の動靜・聞中に有無と爲し、声の無きを無聞と号するも、實は聞の性無きには非ず。声無きは既に滅無ければ、声有るも亦た生に非ず。生と滅との二つ円かに離る、是れ則ち常真實なり」と。因に問う、「七大は是れ何ぞ」と。答う、「六大に知根大を加う」と。問う、「知根大は是れ何物なるか」と。答う、「見聞臭嘗觸覺なり」と。問う、「若し爾らば六根六識に在いて何ぞ重ねて挙げん」と。答う、「二十五人の境を悟るが故に此の如し、離と合とは機の不同に依る」云云と。問う、「根・境・識を悟入門と爲す、其の意、如何ん」と。答う、「彼の性の空寂を觀て、悟入の義と爲す」と。故に彼の經に云く、「三科七大は皆な如来藏なり」と。又云く、「見聞覺知、分隔すること能わず、一つの円融清淨の宝覺を成ず」と。又た問う、「上來の諸文は此土に於いて六塵說法の義を成すこと、妙に一家の釈と稱す。爾、智論・唯識、文に違ふ、何ん」と。答う、「二代の今經余塵分明なり。疑うに足らず。但だ智論に至りては別仏を挙げると雖も、一仏を遮らず。若し是れ一途なるか。又た唯識論は多分の説に従いて且らく此土に名句文を説くと云う。謂は名句文を施して、能詮の用と爲し他をして解を生ぜしむ、故に三つを仮立すと云う。故に若し名句文に依らざれば、説法とは名づけず。是れは多分の釈、一往の説なり」云云と。

○『伝通記釋鈔』：淨土宗の良忠『觀經疏伝通記』に対する注釈書。四八卷。淨土宗の聖間（二三四一―一四二〇）の撰述であり、応永二年（一三九五）十二月十九日に成立する。○又彼首楞嚴經音說三真實：「補1」。○円通：絶対の真理はすべてのものにあまねくゆきわたっている。仏・菩薩のさとり境地。○所証：証得したこと。さとしたところ。さとり。○釈成：解釈。○遐邇：遠いところと近いところ。○彼經第六云く是則常真實矣：「補2」。○彼經云、三科七大皆如来藏矣：「補3」。○又云、見聞覺知融清淨寶覺：「補4」。○七大：地・水・火・風・空・識・見の七つの原理について、周遍法界の義を明らかにしたもの。『首楞嚴經』卷三に説かれる。○大：元素。大種。広くゆきわたっているのと大となづけた。○六大：万物を成立させる万有の本体である六つの根本要素。地大・水大・火大・風大・空大・識大。

この六つはそれぞれ遍満している。○知根：眼耳鼻舌身意という六つの感覺器官。六根のこと。○悟入：悟ること。真理を悟り、真理に入ること。○空寂：一切の事物は実体性がなく、空無であること。○如来蔵：すべての衆生に具わっているといわれる悟りの可能性。仏性と同一。○一仏：一人の仏陀の意。一世界ごとにただ一仏のみ出現し、衆生を教化するとされる。○六塵說法：仏が色などの六塵をもって說法すること。○六塵：色・声・香・味・触・法の六種の認識の対象。六境と同じ。○今経：この經典。○余塵：後塵。先人の残したおしえ。遺訓。余風。○此土：われわれの世界。○名句文：名は事物の名で、単語を指す。句は「諸行無常」などの成句、文章のこと。文は名と句とがよりどころとする音声の屈曲、文字つまり個々の音節。これらがおのおの二つ以上集合するとき、身という。部派仏教ではそれ自体を存在するものと説く。經量部やその影響を受けた唯識派ではそれらを仮有とし、声の上に現れた区分にすぎないとみる。○能詮：言い表すもの。經典に説かれる意義内容を表す文句をいう。○但至智論雖拳別仏、不遮一仏：「補6」。○唯識論故云仮立三故：「補5」。○仮立：仮に設立すること。ある対象に関して、名称を用いて種類を指し示すこと。

〔訳〕また『首楞嚴經』中では二十五の円通(さとり境地)を説いている。いわゆる六根・六境・六識・七大はすべて悟りの門である。『首楞嚴經』の会座には、二十五人がいて、おのおのが悟りを得た因縁を述べている。観音は聞声で、勢至は念仏三昧などである。ここで言う、円通(さとり境地)とは、所証(さとしたところ)の理徳である。詳しくいえば円・常・通の三つの真実がある。円は円満、常は常住、通は融通である。經中では観音に集約して三つの真実を説いている。そして仏地房(覺晏)は「字」義をもって二十五人(の悟りの因縁)にわたりこれを解釈した。『首楞嚴經』の第六に言う、「たとえ人が静かにしているとき、十方でともに太鼓を打つと、いたるところで同時にそれを聞くようなものである。これが円真実である。垣を隔てて音の響くを聴くときに遠いところでも近いところでも聞こえる。これが通真実である。音声の本性の動静はを、聞くという知覚において」有る無しと判断し、声が無いことを無聞と言うが、実際に聞くという本性が無いわけではない。声が無いときに「本性が」滅することは無いのだから、声があるときに「本性が新たに」生じるわけではない。生と滅との二つは円かに離れている。これが常真実である」と。そこで尋ねる、「七大とは何か」と。答える、「六大(地大・水大・火大・風大・空大・識大)に知根大(六根)を加えたものだ」と。質問する、「知根大(六根)とは何か」と。答える、「見て聞いて臭いで味わい触れ考え知る(六根のはたらきの)ことである」と。質問する、「もしそうであるなら六根六識においてどうし

て重ねてとりあげるのか」と。答える「二十五人が境を悟ったからこのようにしている。分けたり合したりするのは、それぞれの機が同じではないことによる」云々と。質問する、「根と境と識は悟りの門であるとしているが、その意は何か」と。答える、「その本性を空寂であると観て、悟入の義とみなしている」と。だから『首楞嚴經』に言う、「三科七大はすべて如来藏である」と。また『首楞嚴經』に言う、「見聞覚知は分けることができず、円融なる清浄な貴き覚りを成就する」と。また質問する、「上来の諸文は我々の世界における一仏について六塵説法の義を成すのであり、一家の積であると言え。あなたは『大智度論』や『成唯識論』の文と相違しているがどうか」と。答える、「釈尊が〔娑婆世界の〕一代にわたって説いたこの經典には教えが明白に記されている。疑うに足りない。ただ『大智度論』では別仏を挙げるが、一仏を否定してはいない。もしくは同一であろうか。また『成唯識論』は多くの説にしたがってこの世界で名句文を説いたと言う。名句文を施すとは、能詮（言葉）のはたらきを為し他者を理解させる、だからこの三つを仮に立てるといっているのである。だから若し名句文に依らないのであれば、説法と言えない。これが多分の解釈であり、一往の説である」云々と。

〔補注〕

1 又彼首楞嚴經く音説三眞実：持阿『選択決疑抄見聞』においても、「仏地房以義巨二十五人積成之也。三眞実者、經第六云、譬如人静居十方俱擊鼓十処一時間。此則円眞実也。隔垣聽音響遐邇俱可聞。是即通眞実。音声性動静、聞中為有無、無声号無聞、非実聞無性。声無既無滅、有声亦非生生。滅二円離。是則常眞実矣」（浄全七・六四二a）と、ほぼ同文が引用されている。

2 彼經第六云、譬如人静く是則常眞実：『首楞嚴經』卷六「譬如人静居、十方俱擊鼓、十処一時間 此則円眞実、目非觀障外、口鼻亦復然、身以合方知、心念紛無緒、隔垣聽音響、遐邇俱可聞、五根所不齊 是則通眞実、音声性動静 聞中為有無、無声号無聞 非実聞無性、声無既無滅 声有亦非生生、生滅二円離、是則常眞実」（大正藏一九・一三〇c）一三一a。

3 彼經云、三科七大皆如来藏矣：『楞嚴經集注』卷五「三科七大皆如来藏心義也」（統藏一七・一三一c）。

4 又云、見聞覚知く融清浄宝覚：『首楞嚴經』卷六「見聞覚知不能分隔、成一円融清浄宝覚」（大正藏一九・一二九c）。

5 但至智論雖拳別仏、不遮一仏：『大智度論』卷七「序品二」「如是等無量仏世界種種嚴浄、願皆得之、以是故名、願受無量諸仏世界」（大正藏二五・一〇八b）とある。

6 唯識論へ故云仮立三故：『成唯識論』卷一「且依此土、説名句文依声仮立、非謂一切。諸余仏土亦依光明妙香味等仮立三故」(大正藏三一・六b)。

⑳「原文」問、楞嚴經云、得陀羅尼入仏知見。法花經云、開示悟入仏之知見。人師尺中云、挙於六中初後二根、故云知見。今疑仏之一字或翻曰知、仏之一字或翻云覺、六中知覺豈非重耶。答、此有深理。夫仏一字即是物体円融宝覺。知見即是於別用中対法塵境名之為知。対香味触亦云覺也。故法花肝心真言中曰、**「~~サハミヤミヤミヤミヤミヤ~~」**薩嚩(一如)勃駄(知也覺也) 枳惹囊(知) 左紇瑟毘耶見*。今謂梵語既別、二知豈同。漢語單淺、其共名雖同、梵音既異、義不相濫。故楞嚴云、見聞覺知不能分隔、成一円融清浄宝覺。心根義略知如斯。

「訓」問う、「楞嚴經」に云く、「陀羅尼を得て仏知見に入る」と。『法花經』に云く、「仏の知見を開示悟入す」と。人師の尺中に云く、「六中の初後の二根を挙ぐ、故に知見と云う」と。今疑うらく、仏の一字或いは翻して知と云い、仏の一字或いは翻して覺と云うも、六中の知覺豈に重なること非ざらんや。答う、「此に深理有り。夫れ仏の一字は即ち是れ物体にして円融の宝覺なり。知見は即ち是れ別用の中に於いて法の塵境に対して之を名づけて知と為す。香味触に対しても亦た覺と云うなり。故に法花の肝心真言中に曰く、「**「~~サハミヤミヤミヤミヤ~~」**薩嚩(一如)勃駄(知なり覺なり) 枳惹囊(知) 左紇瑟毘耶(見)」と。今謂らく梵語は既に別なれば、二知豈に同じからんや。漢語は単に淺く、其れ名を共にして同じなりと雖ども、梵音既に異なるれば、義は相い濫せず。故に『楞嚴』に云く、「見聞覺知分隔すること能わず、一の円融清浄の宝覺を成す」と。心根の義は略ぼ斯の如しと知る。

○楞嚴經へ入仏知見：「補1」。○陀羅尼：サンスクリット語 *dhāraṇī* の音写。經典を記憶する力、善法を保持する力を原義とし、さらに呪文の意として用いられるようになった。○知見：智慧によって見ること。知識に基づいた見解。○法花經へ仏之知見：「補2」。○開示悟入：世の人々に、仏の智見を開示し、悟らせて仏道に入らせること。○人師尺中云、挙於六中初後二根故云知見：「補3」。○人師：人のために法を説く師。○知覺：分別すること。思考。○円融：円満融通。完全にして欠けることなく一体となって互いに妨げないこと。○法塵：六塵の一つ。意根の対象であるもろもろの法をさす。○法花肝心真言中曰、**「~~サハミヤミヤミヤミヤ~~」**薩嚩(一如) 左紇瑟毘耶見：「補4」。○薩嚩(一如) 左紇瑟毘耶見：「補5」。○見：他の

日仏四六・一四五〜一四六」とあり、『心根決疑章』収録のものとは一致していない。この部分でいえば、日蓮の『開目抄』で引用された真言「薩縛勃陀枳攘〈知〉娑乞芻毘耶〈見〉」(大正藏八四・二二〇a)のほうが近いか。日蓮(二二二二〜一二八二)は『教機時国鈔』に、「建仁より已来、今まで五十余年の間、大日・仏地、禪宗を弘め、法然・隆寛、浄土宗を興し、実大乘を破して權宗に付き、一切經を捨て教外に立つ。譬えば珠を捨てて石を取り、地を離れて空に登るが如し。此は教法流布の先後をば知らざる者なり」と記しており、仏地房覺晏を、同時代を代表する禪僧の一人として挙げてゐる。宮崎英修「教機時国抄にみられる大日仏陀—大日仏地—」(『大崎学報』一三六、一九八三年、一〜一七頁)と館隆志「達磨宗新出史料『心根決疑章』と仏地房覺晏」『駒澤大学仏教学部論集』五一、二〇二〇年、一〇三〜一二六頁)を参照。

5 薩縛(一知)〜左紇瑟毘耶見: 『別行抄』「法華肝心真言」に「薩縛勃駄(一切仏也)枳攘(二合)曩(知也)娑乞芻(二合)毘耶(見也)」。『覚禪抄』「法花法諸流」に「法合」毘耶(見也)。(該当部分の右側に「*saṅghaḥ saṅghaḥ*」の梵字が記される)とある。『覚禪抄』「法花法諸流」に「法花肝心真言」に「薩縛勃駄(一切仏也)枳攘(二合)曩(知也)娑乞芻(二合)毘耶(見也)」。『法華經』(大日仏四六・一四五〜一四六)とある。また、日蓮『開目抄』では、「善無畏三藏ノ法華經ノ肝心真言云、曩謨三曼陀(普仏陀)唵(三身如来)阿阿暗悪(開示悟入)薩縛勃陀枳攘(知)娑乞芻毘耶(見)譏譏曩三姿縛(如虚空性)羅乞叉爾(離塵相也)薩哩達摩(正法也)浮陀哩迦(白蓮華)蘇駄覽經惹(入)吽(遍)鉢(住)発(歡喜)縛日羅(堅固)羅乞叉輪(擁)護婆婆訶(決定成就)。此真言ハ南天竺ノ鉄塔ノ中ノ法華ノ肝心ノ眞言也」(大正藏八四・二二〇a)とある。水橋教義『開目抄』に記された法華經の肝心真言について(『東洋哲学研究所』九、一九九三年)が示す復元案では、「薩縛勃駄」を *saṅgha-buddha* (一切の仏)、「枳攘(曩)」を *jña* [*na*] (智慧)、「娑乞芻毘耶」を *sāṅghyaḥ* (見を有するもの(に))とする。

6 楞嚴云〜円融清浄宝覺: 『首楞嚴經』卷六「見聞覺知不能分隔、成一円融清浄宝覺」(大正藏一九・二二九c)。

〈キーワード〉 仏地房覺晏、心根決疑章、達磨宗、孤雲懷奘、首楞嚴經、唯識、宗鏡録